



あの子に会える噂の
マッサージ屋さん

Vol.2

大好きだったあの子に会えちゃう
秘密のマッサージ屋さんによるこそ！



新社会人として十分とは言えないまでも、スタートを切ることができた今日この頃。

職場の先輩から勧められたとあるマツサージ屋。

取引先から紹介されたというそのお店は、「自分の好きなキャラクターに会える」というものだった。

なんとも胡散臭い話だとは思いつつ、

そのお店の話を取引先とするようになってから、仕事が順調になったとのこと……

正直に言えば、
自分もそういうお店には行っている。

いまさら嫌悪するわけでもないのだが、
やはり新しいお店というか、

初めての場所というのは警戒してしまう。

自分が新卒者であることも警戒を高める理由であろうか……
何事にも構えてしまうのだ。

しかし自分自身も今後は取引先とかかわることになる。
その場において、話のタネを用意しておくことに越したことはない。

先輩はそれで上手くいった。
もしかしたら、からかわれているだけかもしれないが…

だがしかし、

そのお店は完全な会員制。

自分の紹介した会員の評価はおのずと先輩にも関わることになる。
下手な人間を紹介することはないはずだ…

これは自分に対する、先輩からの期待なのか？

そんな「下手の考え休むに似たり」をブツブツと呟いているうち、
今日の終業時間を迎えた…

帰り際には先輩からの無言の目配せ…

「…行つて来いってことか？」

何事も勉強！

食わず嫌いは良くないと自分に言い聞かせ、
勢いよく上着を羽織る。

そのままの勢いに任せて、
お店の方へと足を運ぶのだった…

先輩からもらった地図を頼りに、わき目もふらずに歩いてきた。
その場所はまったくもって普通の住宅街の中。

「先輩も最初は驚いたって言ってたけど……」

本当にこの場所で合っているのかと心配になった。
まさしく先輩と同じ心境だ。

看板らしきものも一切ない。

お店の場所を知らせる案内も見当たらない……
まさしく「知る人ぞ知る」ということなのか。

会員制であればそのようなものは一切必要ないだろう。
しかしそのあまりの思い切りの良さに、
ただただ驚かされていた。

191



「実際に来てみないと、雰囲気そのものって分からないよな……」
などといっちょ前に感心してしまった。
まだ入り口に立ったただけだというのに……

少しばかり迷ってしまったが、
無事に指定された部屋の前までやってこれた。

このような機会でもなければ、
一生立ち入ることもなかったであろう部屋の前。

チャイムを押すだけでよいはずなのに、
少しばかり躊躇してしまう……

部屋の中の様子を知りたくて、ドアに耳を当ててみたり、
周りに誰もいないかと伺ってみたり……
ただただ不審な動きをしてしまっていた。

191



「…我ながら情けない…」
ガックリ肩を落としてしまった自分にさらに情けなさを感じる。

実際には一、二分程度であつたはずだが、
躊躇している時間はなんとも長く感じられた。

「先輩に認められるためにも！
そして何より自分の将来のためだ！」

などと訳の分からないことを決意し、
ついにチャイムに手を伸ばした。

「ピンポーン」

案外大きく廊下に響いた音に少々驚かされる。

191



「……」

「……おや？」

応答がない。

「へっ、部屋を間違えたか」

一瞬で頭の中が混乱してくる。
確かに予約時に伝えられた部屋の番号。
躊躇している間にも何回も確認したその番号。
間違っではない。



「もっ、もう一回……」

恐る恐る二回目を試す。

「ピンポン」

再び廊下に響く電子的な音。

ドタドタドタ...

「はっ！ はいつ！ はいつ！ はいつ！ はいつ！」

191



なんとも慌ただしく、騒がしい感じの音が返ってきた。
一体何事かと、インターフォンに釘付けになった。

「あっ！あの…予約したもなんですけど…
大丈夫ですか？」

まだ顔も見えていない女性だが、
そのあまりの状況に心底心配してしまっていた。

「はっ、はいっ！大丈夫ですよ！」

「ごめんなさい！ちょっと準備に手間取っちゃって！」

予約とは何だったのかと、
そんな考えが一瞬頭をよぎったものの、
とりあえずその場は取り繕うことにした。

191

「あの、中に入って大丈夫ですか？」

「はいっ！もちろんです！」

「中にごうぞー！」

少し落ち着きを取り戻したかのような声。
綺麗な響きが耳に心地よい気がした。

「失礼しまーす……」

重厚な扉を開くと、そこはいたって普通のマンションの一室。

ここがマツサージ屋であるという知識がなければ、ただただ一般人の住む部屋に迷い込んだと思うだろう。

「……ヘルスみたいなお店とは大違いだな……」

そこにはまだお相手の姿はなかった。

ヘルスのようなお店であれば、扉の先やカーテンの向こう側に女性が立っていて、お出迎えしてくれるのが普通だ。

何やら奥からは慌ただしい雰囲気漂う。

「ふえええええあああああ！」



「お出迎えもまだだったし、
急いで出なきゃって思ったら足が……」

「ごめんなさい!」

「ああ……いえいえ、大丈夫ですから」

「あっ……」

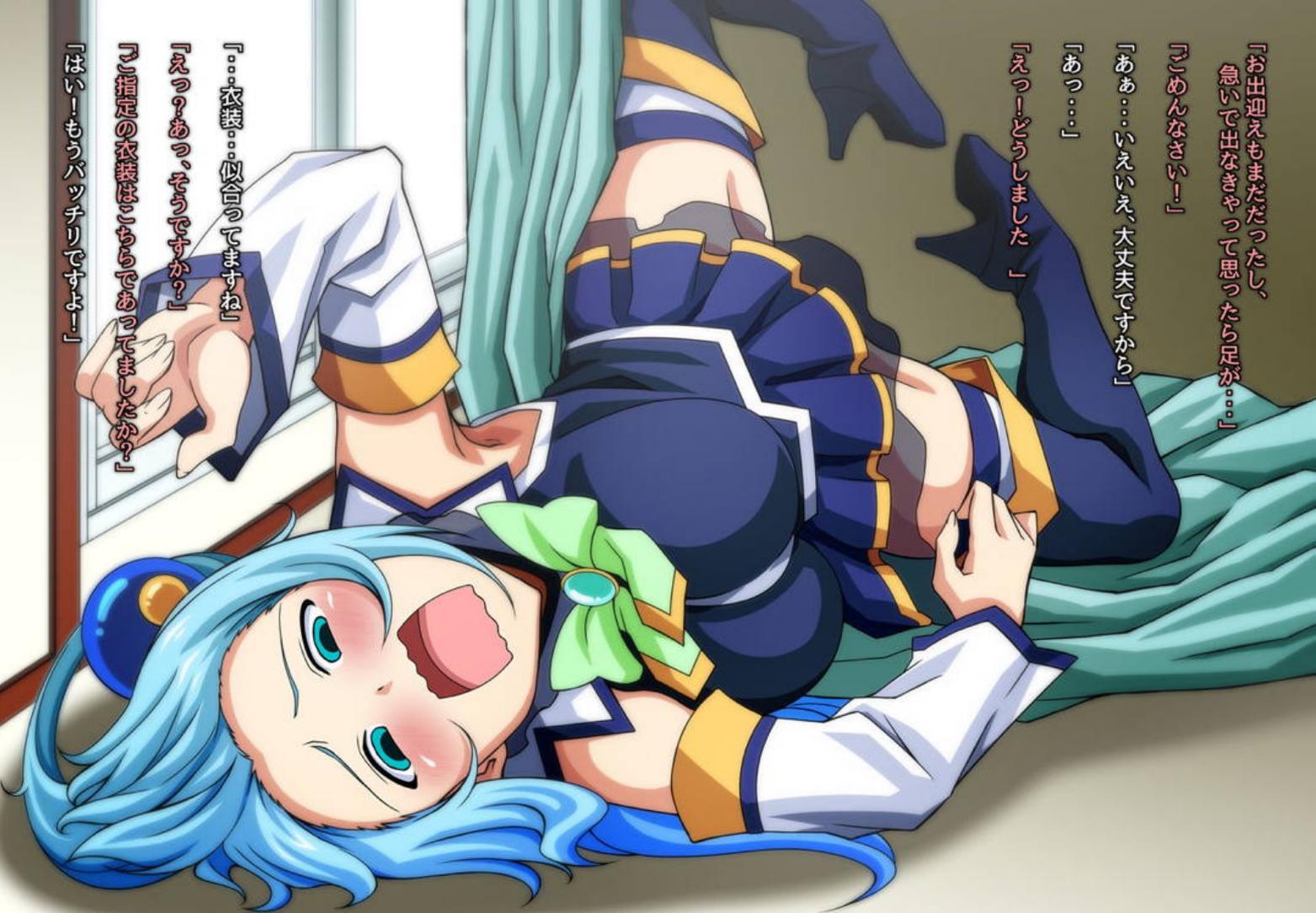
「えっ! どうしました」

「……衣装……似合ってますね」

「えっ……あ、ううんですかっ!」

「お揃いの衣装はいいんですけど……」

「はい! もうバッチリですよ!」



「せっかく衣装も指定してくださったのに……」
「めんなさい、こんなお出迎えになっちゃって……」

「ああ、いえいえ……むしろイメージ通りというか……
それっぽいというか……」

「えっ？ それってどういう……」

「ああー何でもありませんよー」

「なんですか……」

「……は……は……は……は……は……は……」

「……私の……私の……私の……私の……私の……私の……
シャワールームになっておりますー」

「まずは「こちらにて汗をお流しになってくださいー」



「中にあるアメニティーなども、自由にお使いください！」

「わかりました」

「はい、さようならです」



「いたたた…」

「指定したキャラクターはあの子だったし、まさしくイメーシ通りって感じたな」

「…だけど、まさかあそこまでイメーシ通りとは…」

「あんなにエロい子が近くにいる、

なおかつ隣で寝てたりするのに、

どうして手を出さないのか疑問だったけど、

実際毎日あんな感じだったたりしたら

手を出す気にもならないのかな…」



「…うん、

向き真面目な感じまでしてると俺…」

「あの子はあんなにエロいお兄さんのイメーシ通りさん
あの子そのものでやな…」

「…馬鹿野郎
何を期待してんだ俺は！」

「だけど…生殺しも…つなご…な…」
「はあ…」



「…だけど」

「さ目の前に来られたら…嬉しいよな」

「俺の大好きなキャラクターだし…」

「この店を紹介してくれた先輩には感謝しないと」



「がちゃん！」

「…ん？」

「お湯加減、大丈夫ですか？」

「えっ！ あっ、はい！大丈夫です！」

「あっ！ごめんさー！
驚かせてしまいましたか？」

「ええ、あっいえ！」

「まさか入ってこられるとは思ってもしなくて！」

「えへへ、よろしければお背中を流してあげようかと…。」

「えっ！ いいんですか」



「はっっー」

「他の子はやってないみたいなんですけど、
マッサージュ前にお話しした方が、よりリラックスできるかなって」

「あっ！じゃあ、タオルを巻きますから、
ちょっと待っててもらえますか？」

「えっ？」

タオルなんか巻いたら体を洗えませんよっー」

「でも…裸ですから…」

「ああ、そんなお話をしたらダメっー」

「えっー… あっー… ちゃっっーっー」



「失礼します！」

「うわっっー！」

「どうぞリラクゼーションしてくださいねえー！」

「べっ、べっも…ありがとっ…！」

「えへへ、お背中洗いますねー！」

「ごめん…こんなことしてくれるとは思っていませんわ！」

「結構これ評判がいいんですよ！」

「お店からはある程度自由にしていいって言われてて、これは私からのサービスです！」

「そっ、そうなんだ！」

「てっきりシャワーは一人で済ませるもんだとはかり…」

「普通はそうですよね！」

「だけど、せっかくの水の女神様！」

「シャワーからサービースしなきゃ！」



「あつ、そういうところもちゃんと・・・」

「もちろんです！」

「指定頂いたんですから、
衣装だけでなく、ちゃんと本人になりきらないと！」

「・・・本人のようにね・・・なんだか納得・・・」

「あつ・・・さっきのことで思い出しましたね！」

「あれは本当にびっくりで・・・」

「うんうん分かってるよ、
女神様ともある方が、うっかりこげたりなんかしないよね！」

「あああ！　　なんだか馬鹿にされてる気が！」

「あははは・・・」



「あああ……でも気持ちいいよ！
背中を流してもらうなんて何時以来だろう」

「今は一人暮らしですか？」

「そうだね、実家は大学の時に出てきたから」

「一人暮らしだと、ゆっくりお風呂に入るなんてことも
やらなくなりますがからね……」

「さうだね……何かと時間に追われるからね」

「今日はサードスリムシャワーから始めようね」

「サードスリム？
それってどんな？」



「えへへ、それは追加追加とさういふわー」

「私に会いたかったんでしょ？」

「とととんりラックスして、甘えてくれてらいますよー」

「そんなこと言われると…期待せざるは…」

「…んっ」

「…んっ
…んっ…んっ…んっ…」

「ズル…めりんや…」

「何が期待してるんですのいっしょ…」

「…んっ」



「シャワーお疲れさまでした!」

「さっそくですが、マッサージの方始めていきますね!」

「お願いします」

「はーん」

「どこか触ってほしくない場所とかあったら
遠慮せずに言ってくださいね」

「力加減とか、いかがですか?」

「大丈夫ですよ!」

「むしろもっと強くてもいいかな…」

「あっ!わかりました!」

「もう少し強めですね!」

「あっ、そうそう、

今くらいが丁度いいね!」

「はーん」



「お兄さんは…あつ、なんてお呼びすればいいですかね？」

「うん？お兄さんでいいけど…気になる？」

「あつ！いえいえ！

お客様なのにお兄さん呼びは失礼かなって…
気になっちゃいますって…」

「そんな気を使ってくれなくていいよ
今日ここにはリラックスするために来たんだから、
楽しく、打ち解けてお話ししましょうよ」

「そう言っていたけると嬉しいですよ！」

「では…お兄さん」

「うん、なんですか！」

「えへ…」

「お兄さんは誰からの紹介でこちらへ？」

「会社の先輩からだね

何かと俺のことを気にかけてくれて、

なんでも取引先の人がこのお店の常連だとか…」



「話の種として知っておくべきだぞってね」
「なるほどです」

「お兄さんもこのお店が気に入ったのなら、是非新しい会員様をお連れくださいね」

「営業に関しては流石というところだね！」

「あっ！でもお兄さんが来店の際には、必ず私を指名してくださいね！」

「あはは！抜け目ないね！」

「そういうつもりなら、

今日はしっかりサービスしてもらわないと！」

「はい！しっかりと奉仕させていただきます！」



「ご奉仕…か…」

「うん？どうされました？」

「あつ！いや…なんとも耳に心地いい言葉だなんて…」

「お客様の要望にお応えするのが私の役目！
何なりと仰ってください！」

「うん…」

「あつ！今何か考えましたね！」

「えっ あつ、いやそんな…」

「誤魔化せないですよ…えへへ」

「今私がどんな体制でマッサージしてると思ってるんですかあ？」

「どんなって…」



「あっ！お尻が…その…乗っちゃって…」

「もう…」

さつきからお尻に何か固いものが当たってるんですよねえ…」

「マッサージに使う棒か何かがお尻の下に入っちゃったのかな？」

「あっ、あの…ごめんなさい！

シャワーの時から、抑えがきかなくて…」

「あははっ」

「まっ！でも…女神さまのマッサージを受ければ、

誰でもそうなつちやいますよねえ」

「お兄さまが健康な証拠ですよ！」

「ごめんね…でも…そう言いつつ、ごらてはくれなの…」

「ええ？何でどこが必要があるんですか？」

「私はマッサージをしているだけですよ」



「えっ！あぁいや…それはそうなんだけど…」

「ほら！足のマッサージをしますからね！」

「グイッ！グイッ！」

「あっあっ…
そんなにお尻を前後されたら…擦れて…」

「はいつ！力を入れるためにも…！
体全体を使ってマッサージしていきますよ！」

「はいつ！はいつ！」

「えっ！あっ！」

「待って待って！そんなに擦られたら…」



「血行がだいぶ良くなってきたみたいですね!」

「体中熱くなってきましたせんか?」

「マッサージをして、血行が良くなっているサインですよ!」

「う、うん…おかげさまで…だいぶ…」

「このままの体制でもいいんですけど…」

「もっと念入りにマッサージさせていただきたいので…」

「足を開いて、内ももあたりをほぐしていきましょう!」

「あっ、はい…お願いします…」

「はっっー」

「ではちよつとわたくし、返かせていただきますね!」

「お兄さまはゆっくりでいいですよ!」

「急に動いたりすると、腰に負担がかかりますから!」

「ゆっくりと体制を変えてください!」



「マッサージは本当に気持ちいいけど……」

「本当にこのまま、マッサージだけで終わるのか？……」

「（もしそうだとしたら生殺しだな……）」

「お兄さまっ？」

「いかなされましたか？」

「えっ」

「あっ、いやー何でもないよー何でも……！」

「そうですか？」



「はいそれでは足を開いて、リラックスしてくださいね！」

「はいはい、こんな感じでいいかな？」

「はい」

「それでは足の付け根から、順番にほぐしていきますね」

「ああ…内ももあたりがだいぶ凝ってますね…」

「気合入れてほぐさせていただきます！」

「営業で歩き回ってるからねえ…」

「自分でストレッチとかもしてるんだけど、なかなかね…」

「歩き通しや立ち仕事の人は大変ですよね…まかせてください！」

「私がしっかりとほぐして差し上げます！」

「大丈夫と分かったとたん、
もっともっとなつておねだりですか？」

「遠慮がないですなあ〜」

「きつ、気持ちよくて…最高で…」

「えへへ」

「そうなら嬉しいです！」

フフ

フフ♡

「遠慮なんてしなくていいですからね♪」

「リラックストリラックスト」

「お兄さんの大きな大きなこりを
マッサージ〜♪」

「お兄さんの熱い熱いこりを
マッサージ〜♪」

「うあああ……もうそろそろ……」

「えっ？何ですか？」

「もう、もう出そうですー！」

「出さうって何がですかあ……？」

「その……それだけやられれば、
そろそろ……」

「ああ……なるほど、
いりをほくしてたんですもんね！」

「なるなる温まってきたとららうい……ですかあ……」

「んや……そろそろじゃなくて……」

「この部分のマッサージはもうそろそろですかねえ……
もうやめやおうかなあ……」

=1/2!!

=1/2!!



「あー待って待ってー！
もう少しーもう少しでー！」

「ええ……もう十分にマッサージしたのよ……」

「あと少し……！ あともう少しです……！」

「もう少し……え……」

「もっし……もっし……」

「あ……あ……」

「……の……の……」

「ええ……」

わん！
わん！！





「うあああああああああつっ！」

「あらあらあら……」

「はあはあはあ……」

「マッサージをしてただけなのに……
まさか射精をしちゃうなんて思いませんでしたよお……」

「えっ」

「だって今僕の求める癒しをしてくれるって……」

ア♡

ヾㄨ

ヾㄨ

「それは言いましたけども……
エッチな意味でなんて言ってもお母さんじゃ……」

「(うろたう)とされると困るんですよえ……」

「えっ えっ はっ」

「そっ、それは冗談……だよね……」

「うんっ」

「困るってのは本音ですよお……」

「……お」

「私がさらにエッチなことをしたくなつちやうって意味で…
困っちゃいますねえ〜…」

「……」

「こんなに大きくて、固くて…」

「それでいてこんな力強い射精ができる…」

「もっとエッチなことをしたら…気持ちいいんだろうなって…」

「…女神さま、もっとエッチなことを求めてもらえますか」

「…それがお望みなんですか？」

「女神さまともしっかり気持ちいいです！」

「ぎげっくたぎぎー」

「お望みのことをして差し上げるのが私の役目…」

「だけど…これ以上のことは怒られちゃうかもしれませんよ！」

「女神さま…ここまでできたなら僕もはぐらかしたりしません！」

「女神さまと気持ちよくなりたがります！」

「えっ… あっ」

「(内ももをマッサージするからしようがないとはいえ…)」

「(股間に顔が近いなあ…鼻息が…)」

「あーっ…あーっ…あーっ…」

「あっ、あ、あ、あ…」

「は、は、は…」

「どういたしましたっ…」

「一汗ばりやういへんわっ(あ、あ)の汗を…」

「は、は…」

「ちょっとな股間…あ、あ…」

「？」

「あっ！もしかして紙パンツがズレちゃいましたか？」



「そっ、そっじゃなくて・・・」

「それでしたらちよつと直して差し上げます!」

「ちよつと失礼しますね!」

「あつ!いや!そっじゃなくて!」

「あつ!」



「…あ」

「あつーいやこれはー」

「…」

「ごめんね！すぐに戻す…」

「気づけなくて申し訳ありません…」

「えっ」

「私の役目はお客様をリラックスさせ、
お疲れを癒す…」

「…おん」

「それなのにこんなに大きな（こり）を見るげることができないなんて…」

「えっ！あつーいや…これは…」



「お任せください！
私がしつかりと（こり）を取って差し上げます！」

「わっ！わっ！わっ！
ちょっと何をしてー！」

「何って、マッサージですよ？
大きな大きなこりを取って差し上げます！」

「あ…出しちゃった…とは謝るから…
だから…そんなことは…その…」

「マッサージ屋さんに来て、
マッサージを断るなんて…」

「そんなお客様はいらっしゃいませんよー！」

「さっ！どうぞリラククスして、
私に体をあずけてくださるまでー！」

「えっ…ほっ、本当に…っ…」

「はー！」

「#」
「♡」
「♡」

「(本気なのか...からかわれてるのか...?)」

「あははー!」

「えっ なっ、何?」

「急なことでまた頭が追いついていないって感じですね!」

「あっ、はっ...!」

「大丈夫ですよ!」

「この店は会いたい子に会えるマツサーツ屋さん!」

憧れの子に会って、マツサーツしてもらって、
そして日々の疲れを癒せる場所!」

「お兄さんの求める癒しを、わくしが シテ 差し上げる!」

「ですから...何なりとお申し付け下さいばいんですよ!」

「僕の求める癒しを……？」

「は〜ん」

「お兄さんの求める癒しは何ですか？」

「……女神さまと……」

「は〜ん」

「女神さまと一緒に気持ちよくなりたい！
気持ちよくしてあげたいです！」

「えへへ」

「何だかまだ抽象的な言い回しですね〜」

「でも！わかりましたよ！

「一緒に気持ちよくなりたいんですね！」

「そっ、そっです……」



「わかりました!」

「ではまず、今私の手の中で熱く、固くなってるのを…
気持ちよく、気持ちよくして差し上げますね!」

「おっ、お願いします!」

「はっ!」

「強かったりしなうですか?」
「痛いよ!」
「痛いよ!」

「痛くないか?」
「もっ、強くなってる!」

「えへへ」

「流石に元氣ですね!」

「ならもっと早くしていいですか?」

「うあああ……」

うわわ
♡

うわわ
♡

「えへへ…押し倒されちゃいました…」

「その…ごめん…
なんだか我慢できなくなっで…」

「あれえっ…ごまかやっておいて怖気づいちゃいましたか？
女神さまを押し倒しておいで…」

「えっど…」

ド
キ

「せっかく私もその気になったのに…
お兄さんが嫌ならしょうがないかなあ…」

「ああー待って待って！
したいです！
女神さまと一緒に気持ちよくなりたいんです！」

「えへへっ
正直に言えたりじゃないですか？」

「正直者には女神さま…褒美をあげないといけませんね」

「おっ、お願いします」

「……もう……そろそろ……」

「えっ？……あっ……」

「中に出すのは……さすがに……」

「嫌っ！」

「えっ」

「外なんて出さないでええええ！

中……」

「中を出してんだぞ！」

「そっ……そんな……」

「それはさすがに……」

「大丈夫だから！
大丈夫だから中にいいいいいいいい！」



「本当に」

「本当に、いいんですかあ」

「はいっ！」

「私の中…女神の中におもいつきり！」

「おもいつきり！ぶちまけてええええええ！」

「うっ、うっ……」

「遠慮……なく……」

「出して……出して……出して……出して……出して……」

「中にぶちまけてええええええ！」

「……うっ、うっ、うっ、うっ、うっ、うっ……」



「……うっ……はあ……はあ……」

「おなかの中……熱い……熱い……」

「溢れちゃいましたね……」

「はっ！はっ！はっ！」

「だっ、大丈夫でしたか」

「はっっ……ちよっつ……」

「気持ちよすぎて……身体が熱くなりすぎちゃっつ……」

「遠慮なしに出しちゃいました……」

「えへ……えへへ……」

「これは誤魔化しようがないほど……出されちゃいました……ね」

「女神さまを種付けしたんですよ……」

「気持ち……よかつたですかあ……」

ぽっ ぽっ

「もう最高で…今までで一番気持ちよかった…かも」

「えへへ…お世辞でも嬉しいです！」

「いや！お世辞なんかじゃなくて！」

「えへ！
必死になっちゃうところとか…可愛いです！」

「ハァ♡」

「ハァ♡」

「そんなことは…お店でセックスしちゃうような
ひどい客だよ…僕は…」

「あれ？
また怖ろしかったですか？
……まだしちゃうんですか？」

「うっ…それは…
賢者タイムというか…その…」

「もう…そんなガックリしないでください…」

「しょうがないなあ……
若いですから、まだまだお元気ですよね？」

「えっ……？」

「体力だってまだまだたっぷりあるはずですよ！」

「お兄さんが満足しても、私がまだ満足してません！」

「それは……」

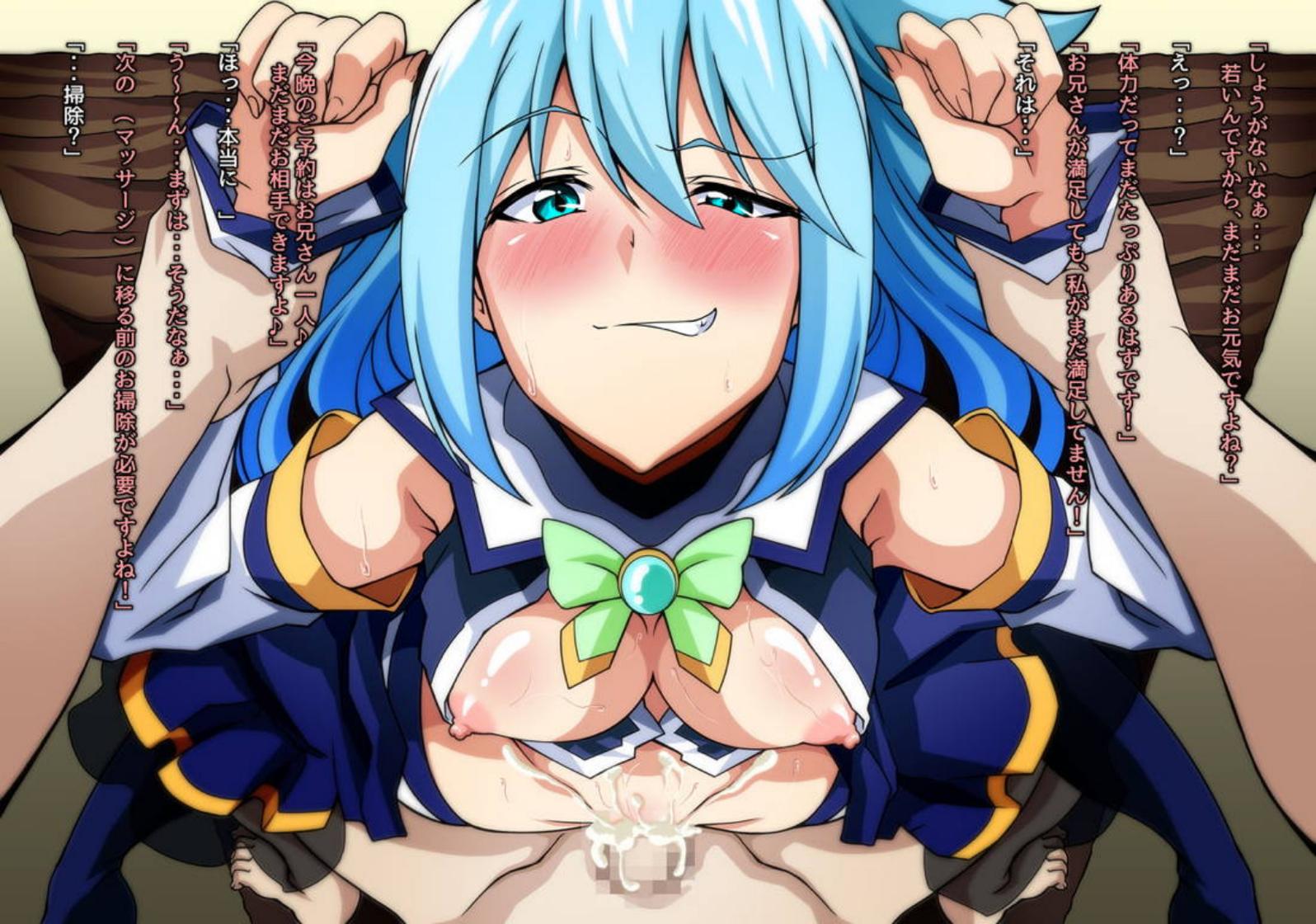
「今晚のご予約はお兄さん一人だけ
まだまだお相手できますよっ」

「ほっ……本当に」

「う……ん……ますは……そっちなあ……」

「次の（マッサージ）に移る前のお掃除が必要ですよね！」

「……掃除？」





「ちっぴ」

「お捕察」

「お捕察ですまおっ」

「だけど、このことは絶対に内緒ですからね♪」

「はっ、はい！もちろん！」

「お兄さんが正直に、私と気持ちよくなりたくないと告白してくれた…
それで私も気持ちが高ぶって…いいですね？」

「誰にも言いません！
今後紹介する人たちにも、絶対に！」

「自分も…褒美がほしいなら、自分自身から行動！
お兄さんはちゃんとそれができましたね♪」

「はい！女神さまに会えるよう、
お仕事頑張ってるし、勇気を出してお店にも来ました！」

「えへへ」

「…だけとお兄さんが好いてるのは、
あくまで女神さまを…なんですよね…」

「…ちよつと残念…かな」

「えっ？
それってどうらう……」

「いえ！何でもありませんよ！
それよりもほらっ！このまま何もしないんですか？」

「あっ！いや！
女神さま！私と一緒に気持ちよくなりましょう！」

「うん！ゆっくり……最初はゆっくり……ね？」

「はい！女神さまの中に……俺のを！」

「ああ……！挿って……きちやう……
私の中に……大きいのが……！」





「...」

！

！

！

「あああ……はっ……！」

「はっ……挿りました……よ！
女神……さま！」

「はっ！はっ！はああ……！」

「ギッチギチ……だっ……！」

「お兄さんの……大きすぎ……！」

「一番奥まで……届いてる……！」

「うああ……最高だっ！」

「女神さまの中……最高です！」

「ああああ……そんなハツキリ言われたら……
なんだか恥ずかしく……なっちゃう……！」

「うああ！より一層きつく……なって！」



「女神さまは声に出して説明されたりすると。。。あそこがきつくなる体質なのかな？」

「いやあ…そんなハッキリと言わないでくださいー！」

「ほら！今もあそこがギョツ！ギョツ！っどー！」

「そんな…！」

「この状態で突いたら…どうなっちゃうのかなあ？」

「えっ！はあああ！」

「そりゃーそりゃー！」

「あっ！ひああああ！」

「ゆっくりとー最初はゆっくりとおおお！」



「あああああーキツイ！
女神さまのま〇こー！
最高にキツイ！」

「あつ！あつ！あつ！
ひあああああああああああ！」

「突かれるたびに……！
身体が……！」

「感じてー僕ので感じてーくださいー女神さまー！」

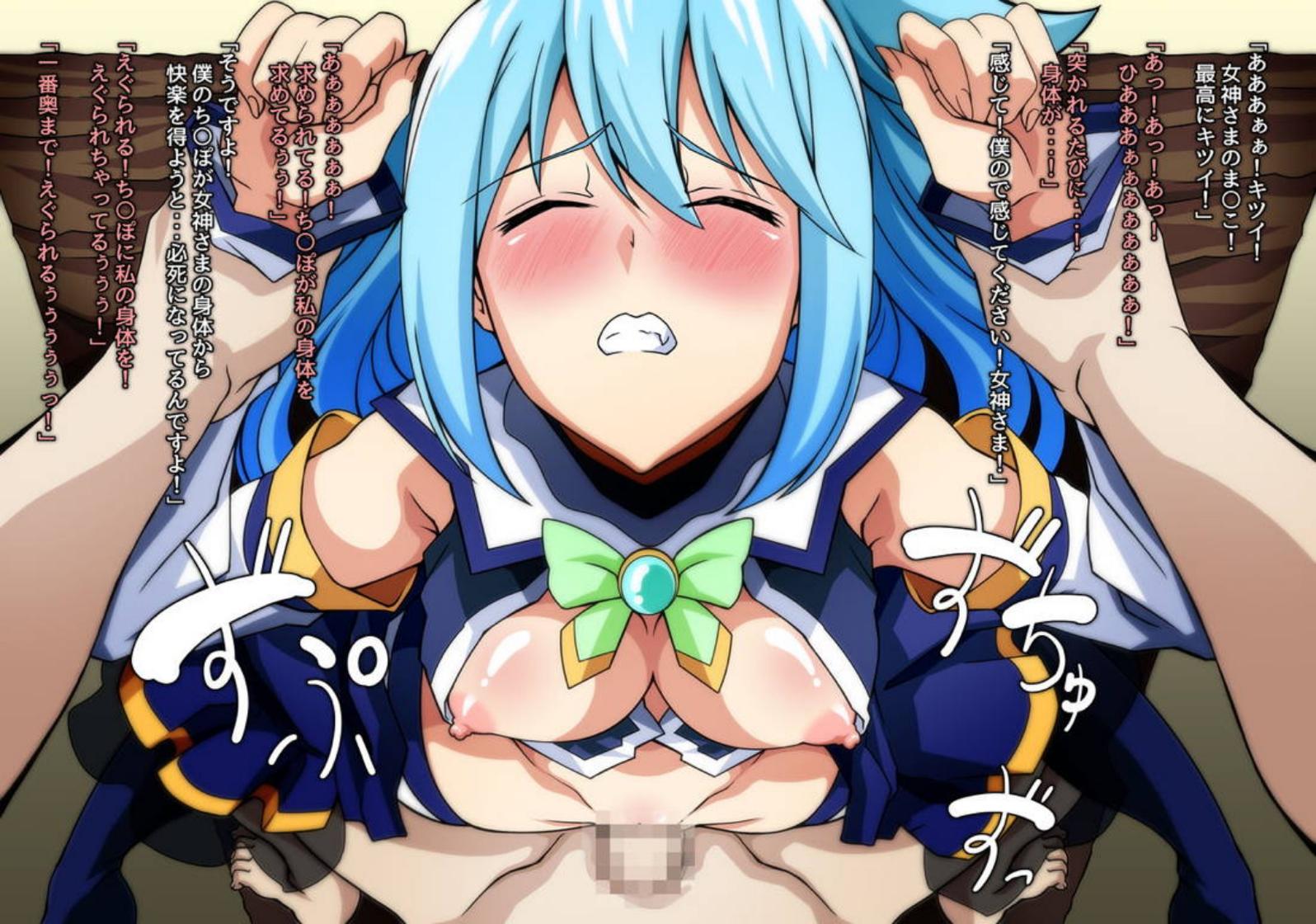
「あああああああ！
求められてるーち〇ほが私の身体を
求めてるううー！」

「そうですよ！」

「僕のうち〇ほが女神さまの身体から
快樂を得ようと……必死になつてるんですよ！」

「えぐられるーち〇ほに私の身体を！
えぐられちゃつてるうううー！」

「一番奥まで！えぐられるうううううー！」



「このお店に来たかいたがあったあ！」

「こんな最高のお店！」

「何で今まで僕は知らずにいたんだらう！」

「お兄さんが来てくれて！」

「わっ…私…」

「嬉しいです！嬉しい！」

「はははっ！」

ハッ♡

ハッ♡

「いいですか？」

「僕どのプレイ！そんなに……」

「いいんですかあー！」

「うんーす」

「ぶっどちち〇ぼす」

「身体の奥の奥まで貫かれるうっうっうー！」

「ぶっどちち〇ぼセックス！」

「一番奥までのぶっどちち〇ぼセックス！」

「あああ……！」
「言っちゃった！セックスって言っちゃったあああ！」

「女神さま……」

「女神さまはプレイ中は気持ちが高まっちゃうんですか……ね！」

「そんなはしたない言葉を叫んじやうなんて！」

「はいっ！ごめん……なさい！」

「ち○ぽが好きだから！ ち○ぽが好きだからあああ！」

「お兄さんとセックスできて嬉しかったからああ！」

「ならち○ぽもっとなんて言っちゃだめだぞ……！」
「僕のち○ぽで喘ぎまくってくださいな！」

「あっ！あっ！あっ！あっ！あっ！あっ！」

「ち○ぽ突いて！ち○ぽ突いて！ち○ぽ突いてええええ！」

「くっ……はあー！」

いっ
いっ

「そちらにお立ちくださるね」

「さっ、これでいいの？」

「はー」

「どっせリラックスしててくださるね」

「鼻息が当たるほど近いね…」

「へそぐったいですか？」

セク

セク

「さっき出したばかりだからね…」

「あ…まだ洗ってないけど…」

「そんなの気にしません！」

「ああ…こんな大きいのが私の中に…」

「立派ですね…目の前だと持た…」

「このまま出しますからね！
女神の口に……！」
「出しますからね！」

「んんんんっ！
んん！」

「出します……出します……！」

「んんんんんっ！」

ぢゅる

ぢゅぽ

ぽ





「んんんうあああああつ!」

ん
ゆ

るるる!!

「んへえあああああ……」

「げはっ……おええ……」

「あくぅ……はあ……はあ……はあ……はあ……」

「うえええ……はあ……」

ごぼ♡

フ～♡
フ～♡

「だっ……大丈夫だった？」

「うええ……はっ……はっ……」

「だい……大丈夫です……おえ……」

「気持ちよすぎて……女神さまのお口……最高です……」

「よっ…喜んでもらえて…
よかった…です…」

「好き勝手に腰ぎふつちやっつて…」

「ふう…ふう…」

大丈夫です！なんだか頭がクラクラしちゃいました…」

「今私、犯されてるって！

好き勝手に使われちゃってるって…
それが余計に興奮して…」



7-B 7~C

「今まごやっつた…となら…」

経験させてもらえて…」

来たかいがあつたよ…」

「えへへ…そう言ってもらえるなら
頑張った甲斐がありました！」

「…でも」



「べっぴんさん」

「これじゃお掃除の意味がないね」

「えへへ…そうかもしれませんね」

フ〜♡

フ〜♡

「女神さまに可愛がつてもらったから
いつも以上に…かな」

「本当ですか？」

「それなら嬉しいです！」

「この後のマッサージを楽しんでいただくためにも
これからお掃除させていただきますね♪」

「うっ、うん…お願いします」

「えへへ…どうぞかまわずに
マッサージしててくださいなっ」

「それじゃ…失礼します」

「んんむあ……」

「あっ！熱っ……！」

「んん……大きい……むぐう……」

「お兄さんの脈打ってるのが……舌に伝わってきます……」

「女神さまのお口の中……」

熱くて……ぬるぬるで……」

「んんむぐっ……じっかりお掃除させていただきます……」

ぽ♡



「ああ……気持ちいい……最高だー」

「大きいから……んん……全部お掃除できるかな……」

「んん……むぐうっ……うむう……」

「女神さまのお口、最高！」

「そっやって必死に匿えてくれてる姿
それだけで最高に興奮するよー!」

「むぐっ…ありがどうございませす!」

「私は女神ですが、今はお兄さんにご奉仕するのが役目…」

「うへあ…遠慮なさらず」

「私のお口を堪能なさって…ください…」

「言われなくても…ああ…」

「じっくり楽しませてもらうてるよー!」

「むぐっ、むぐっ…嬉しいですす!」

ちゅぽ

ちゅぽ

「その小さなお口っっぱいに俺のイチモツが
匿えられてるんだね!」

「は…むぐっ…」

「私のお口の中、すっごく暖かいです…」

「女神さまの身体を…全部俺ので満たしてみたいな…」

「うへあ…全部に挿れたい…」

「…挿れたい…」

「もっと奥まで啜えられるかな？」

「もっと、もっと……奥……ですか？」

「そう！もっと奥がいいなっ！」

「むぐっ！」

「はっ、挿いる……かな……」

「女神さまの奥の奥まで行ってみたい！」

「はっ、はっ……」

「チャレンジ……してみます……」

「ありがとう女神さま！」

「それじゃ……お邪魔して……」



「おはー」

「おはー」

せー



「ああああ…」

「女神さまの口ま〇じー!」

「んんっ!んんっ!んんぶっ!」

「喉奥まで…俺のを…!」

「んっ!んっ!んんぶっ!」

「女神さまの喉ま〇じー!」

「女神さまの喉ま〇じー!」

「女神さまの喉ま〇じー!」

「んんんっ! んんんんんっ!」

ちゅぽ
ちゅぽ

ちゅる

んんぶ
んんぶ

「ああ…ごめんね！
さすがに苦しかったよね…」

「ああああ…はあ…はあ…
のっ…喉まで犯されちゃいました…」

「大丈夫…ですよ…
ちよつと頭がぼーっとしちゃって…」

「まだできるかな…っ…」

フウ♡

「はっ…はっ…頭張ります…っ…」

「なんだか…これ…」

「犯されてるって感じがして…なんだか…」

「っっ、嫌なぢもっしてなっよ…」

「ええ…やらせてくださっ…」

「私の喉…喉ま〇っ…犯して下さっ…」



「はっ……はい！
女神さまのすべて……犯します！」

「んんんんぶっ！んんんんんん！」

「んあっ！んあっ！んあっ！んあっ！んあっ！んあっ！」

だ
ら
い
よ

「女神の喉ま〇」

今は俺専用の喉ま〇」

「んんぶっ！んんぶっ！んんぶっ！
んんうおおおっつぶ……」

「狭い喉のところを引つかかって！
俺の……ち〇ほ……擦られる！」

「さて……お兄さん？」

「えっ……あつはい……
なんででしょうか……女神さま……」

「さきほどは随分と好きにしてくださいましたね？」

「……いめんな……さくら」



「えへへ、
別に怒ってるわけじゃないですよお！」

「ただ、お兄さんが好き勝手したなら、
そのお返しもしなきゃですよね！」

「そっ、そっですよ……」

「今度は私が好き勝手する番！
私に主導権ですー！」

「おおああぐうぐうぐう。。。。」

「あつーあつーあつーあつーあつーあつーあつーあつー」

「イキそうー
私もイキそうそうそうー」

「一緒にー一緒にイキましょうー」

「はっ、はいー！
女神さまの中で一緒にイキますっー」

「ああああああイクー
イクーイクーイクーイクーイクーイクー」

「ああああああぐうぐうぐうー」





「んんんんうううううううううう!!」

「あ...ん...ん...ん...ん...ん...」

「ん...ん...ん...」

「ん...ん...ん...」

「ん...ん...ん...」

「ん...ん...ん...」

「ん...ん...ん...ん...ん...」



「お兄さん……大丈夫ですかあ……？」

「はあ……はあ……うん、大丈夫だよお〜」

「女神さまの腰ふり……この世のものじゃないみたいで……」

「私もここまで気持ちいいのは初めてかも……」

ハア♡

ハア♡

「下からの射精……私のお腹を買ったみたいだね
お腹の中……ぐるぐる渦巻いてるみたいだね……」

「熱い……お兄さんの精液が……」

「私のお腹の中をぐるぐる渦巻いてるぅ……」

「こんなに射精したのは……」

「女神さまとの相性がいいのかね？」



「本当はっ」

「本当にそう言っただけだと思いますか？」

「うっ、うん！」

「女神さまと俺…最高に相性がいいよ！」

「…女神さまと…ですか？」

「えっ？…あつうん…。」

ハァ♡

ハァ♡

「そつですよー」

「女神さまに会うためだけにいらしたんですもんねー」

「…」

「いぬなはん」

「愛ないん間々ちやりました…。」

「あ…おっかじつ…。」



「さあ！さあ！
次はどういたしますか」

「えっ！」

「さっきから射精しつつもまだ元気な
お兄さんのち○ぽ！」

「私のお腹の中ですっと元気なままですよ！」

「攻守交代しますか？」

「うっ…うん！」

「次は…俺の番かな！」

「まかせてよ！」

「女神さまを満足させて見せるから！」



「その意味ですよーお兄さん」

「（楽しいんだけど……なんだこのモヤモヤは……）」



「お掃除もしつかりしたし、私が満足するまでお相手してもらいますからね！」

「…むしろそれは主権を握られるというより、褒美に近いような…」

「いつ、いいんですよ！」

「私が満足するかどうかなんですから！」

「そっ、そうですか…！」

「お兄さんはどうぞリラククスしててくださいー！私ですべてやってあげます！」

「もし旦那様になつたらっ！」

「あっ、ダメですよ！」

「私に主権なんですから！」

「私がいつだって言うまで我慢してくださいさー！」

「うへえ…それはキツイなあ…！」



「そんなイヤイヤでも、

「こ」はしっかりと元気じゃないですか!」

「そりや、女神さまの裸体を目の前にすれば…」

「嬉しいこと言ってくれますね、

俄然やる気になってきますよ!」

「なんでそんなにノリノリなんだろう…」

「細がら」とはびらんですよ!

ぞるぞる挿れちゃいますからね!」

「へお…あつはびら!お願いします!」

「えへへりただきま〜す!」

ゼク

ゼク



「おんなん」

〃

おんなん

「あつ…はあ…」

「一気に根元までいっちゃいましたよ！」

「はあ…やっぱり女神さまの中…」
「最高ですよ！」

「気を抜いて出しちゃわないうくださいね！」

「私が満足するまでですよ！」



「ハァ♡」

「ハァ♡」

「わっ」

「わっ」

「ぎっ、気を付けます…」

「えへへ」

「意地悪言いましたけど、」

「お兄さんはリラックスしててくださいいね！」

「変に緊張したら楽しめませんもんね！」

「はっ、はっ」

「あつーはああー！
うっぐっ…あああああ…」

「やっぱり…お兄さんの…固くて、大きい！」

「ああ…おっぎとはまた違って…」

「俺の…擦られる…！」

「いい…いいですよ！」

「お兄さんのち○ぽ最高ですううう！」

あ♡

すちゅ

すちゅ

ゅ

「俺も…最高だ…よっ！」

「女神さまに腰を振ってもらえるなんて…」

「はっ、はっ、はあああ…」

「正直者で…私の…おめがねにかなった方だから…」

「えっ？」

「今なんて…」

「あっ
いえっ！何でもないですよ！」

「ほっ、ほらほら！
集中してください！女神のあそび…堪能してください！」

「うっ、うん…はい…」

「あっ！はっ！
うぐ…はあああああ！」

「女神さまに出会えて…俺は本当に…
幸せです！」

「次も絶対に女神さまを指咎しますよ！」

「本当…ですか！」

「ああああ…嬉しいです！
もっともっとお店に来て…私のこと…愛して頂きたいです！」

「はっ！
俺ももっと女神さまのことが好きになりたいです！」



「あああ…はあ…」

「あっ！あそこがより一層しまって…あぐっ！」

「愛してるなんて言葉…言われたら…はあああああ…」

「女神さま…大好きです！大好きですよ！」

「女神さま…俺…もうそろそろ…」

「ええ！もうですか」

「私まだイッてないんですよ！」

「もう少し…もう少し頑張ってください！」



「こんな…激しまりのま〇こじゃ…
もう我慢なんて!」

「もう少し!あああもう少し!
お兄さんのち〇ぽでイキたいんですううう!」

「はっ…はい!
もう少しだけ!もう少しだけ我慢!
我慢!」

「がんばって♡

がんばれ♡
がんばれ♡

「お兄さんのち〇ぽでイキたい!

お兄さんのち〇ぽでイキたい!

お兄さんのち〇ぽでイキたい!」

すちゅ
すちゅ



「それじゃ今度は後ろからいいかな？」

「はい、バックですね！
ちよつと恥ずかしいですけど……」

「俺、この体位が一番好きなんだよね……
なんだかエッチしてるって感じがするし……それに……」

「それ……」

「この体位は女の子を征服してるって感があった……
なんだか興奮するんだよね……」

「女神さまの全部を征服しちゃうつもりなんです……
ちよつとだけ怖いんですね……」

「あああ！そんな本気で……そんなつもりはないんだよ」
「ただなんというか……その……」

「えへへっ冗談ですよ！
人それぞれ好きなのとって違いますからねっ」

「あああああ……ひあああああ……
あああぐうう……」

「はあ……はあ……はあ……
これで……4？……5回目？……かな……」

「腰が……もうガクガクだよ……」

「えへへ……はあ……
私も……何だか腰が抜けちやったかも……」

「えっ！ああ！
だっ！大丈夫ですか」

「めんなさい！
この体勢……きつかったかな……」



「あははっ
そうじゃないですよー！」

「お兄さんの愛情の重さで……
いっばいもちっちゃったから……それで……」

「……？
とりあえず……大丈夫なのかな？」

「もうー
お兄さん、エッチの最中は雄弁なのに……
終わったとたん腰砕けになっちゃうんだもん……」

「「っしゅめんなさい……
最中はなんだか気が強くなるというか……
本気だから……っしゅ……」

「えへへ
そんなとっちらも可愛くて私は好きですよっ」

「ああ……これで俺は完全に変態あつかいだなあ……」

「あらー！」

それじゃ私は、その変態に犯されてしまう
可愛そうな女神さまってことですねっ！

「おおう……そこまで言うか……」

「えへへっ」

気落ちしてる割には……あそこはバキバキで……」

「すっ、好きな体位なんだから当然！」

「でしたら、その好きな体位で思う存分
楽しんでくださいー！」

「私も……その立派なのが欲しくて……
うずうずしちゃって……」

しゅ
しゅ

しゅ
しゅ

「後ろから突くのに興奮する変態に、
犯してくださいなんて……」

「本当の変態は女神さまの方なんじゃないかなあ〜？」

「あれえ？」

「それでお返しのつもりですかあ〜？」

「お兄さんもまだまだですなあ〜……」



「くっ……」

「だけど俺は知ってるんだ！ぶち込んでしまえば……
この女神さまは一気によがり狂うんだって！」

「あははー強がっちゃってえ……」

「やあー今ぶち込んであげるよー」

「女神さまのキツキツま○にねっ！」

「あゝれえ〜犯されるう〜」

「ひぐらうさ……」

「ほおらどうだっ！」

お気に入りのち○ほ！ぶち込んでやったぞ！」

「はっ……はっ……」

えへへ……たっ、大したことはないですねえ……」

「何回も出したから……」

流石に今回は小さいかなあ……」

「くっ……
口の減らない女神めっ！」

「いいさっ……」

今女神を征服してるのはこの俺なんだ！
好きなように楽しませてもらうさ！」

「ほらほら……」

まだまだ体力は有り余ってるからな！」

「あああああ！はあああああ！
あぐっ！……えへへ……頑張っちゃって……」

「ひあああああああ！あぐっ！あああああ……！」

「どっだ！」

「どうなんだ女神！」

「征服されて、
好き勝手腰を振られてるんだぞ！」

「あああああぐっ！
ひああああああ……！」

「あああ……でもやっぱり……
女神さまのま○こ……最高……！
突きたびにどんどん快感が増していくー！」

「あああああああ！

「私も……強がっちゃったけど……やっぱり気持ちいいー！」

「もう降参するのか？
強がってた割には…早かったな！」

「ああっああはああ…
からかうとすぐに本気になるお兄さんが…
ああああ…ちよつと面白くて…あつっ！」

「^^>>…
俺も…おだてればすぐに乗ってくれる
女神さまが可愛くて…」

せく

「あああああ…！」

お互いに強がっちゃって…
ああああああ…でも気持ちいいのは、気持ちいいもん！」

「ああああー！」

いつまでもこうやって女神さまと愛し合っていたいよ！」

「わっ…私もですっ！」

ぱん

「お兄さんはカッコよくて……！
エッチしてる時も愛情……たつぶりだし……！」

「近くにいると安心……あっ………できるからぁ！」

「本当に！」

「本当にそう言ってくれるの？」



「あああああ！」

「本当に……お兄さんにいつまでも近くに住ってほしいですう！」

「へへ……本気にしちゃうからね！」

「女神さまとあるう方が、嘘なんて言いませんよね！」

「はああああい！」

「本当に……本当に大好きですう！」

「なら…俺の愛情…」

しっかり受け取ってくれ！」

「ひあああああああ…はいつ！」

いっぱい私の中に…！」

「お兄さんの愛情を注ぎ込んでください！」

「私の中をお兄さんの愛情で！」

満タンにしちやつてください！」

せく♡

ほのほの！

「誰からねー」
「さっばさっば出してあげるからねえ！」

「ああああああ」
「出してー私の中だっばい出してえええ！」

「…おおおおおお」

「はあ……すっかり楽しんじゃったよ……
今日は本当にありがとう！女神さま！」

「えへへ
そう言っていただけなら、
私も頑張ったかいました！」

「……今日だけじゃなくて、
また来てくれますか？」

「そりゃもちろん！」

「今日のこの一回だけなんて、
寂しすぎるよー！」

「また必ず女神さまに会いに来るからね！」

「……女神さまに……ですか……」

「えっっ？」



「んあああああ女神さま！」

んんん♡

「あああああつあああああああ！」

んんん

んん

んんん!!



「あつはあ……はあ……」

「熱い……ああ……熱い……」

「また……出しちゃったよ……
遠慮なしにぶっかけちゃったよ……」

「ザーメンでいっぱいになれちゃいました……
熱いザーメンで火傷しちゃっ……」

「今の君の姿……最高だよ……」

ゴホ
ホ…

ハァ
ハァ

「いままで見たどんなものよりも
今の君が最高に綺麗だ……」

「ういっ
そんな見え見えのおだて、
お上手ですねっ」

「そっ！そんなんじや！」

「えへへへ」

「冗談ですよ」

「だけど…本当にありがとうございます！」

「いざいざですー！」

「今までのどんなお客様よりも、お兄さんと過ごした時間が一番楽しかったです！」

ハァ♡

ハァ♡

「本気になるからね！」

「エッチとなったら本気にしちゃう僕だからね！」

「本気になってください！」

「その度に私も本気でお相手させていただきます！」

「何度でも！」

「…あつ…あのか…」

「…はら」

「うすうす…考えていたどらうか…
思ってたんだけど…」

「…あつ…あつ…あつ…」

「僕のいど…その…」

「…」

「…」

「正直にー」

「えっ」

「正直に言ってくれたなら、

女神さまはその者にー」褒美をあげれるんですよー」

「えっ！あつ…うん…えっと」



「僕のこと好きなのかなって…。」

「好きになってくれたから」

「今日はこんなに良くしてくれたのかなって…。」

「…お兄さんはどうなんですか？」

「私のこと、好きになってくれたんですか？」

「そっ、そりゃ！」

「こんなに可愛くて、献身的な女性なら」

「喜んで好きになっちゃうし！」

「いつもそばに居てくれるなら」

「これ以上に嬉しいことなんて…！」

「えへへ」
「やっと言ってくれましたねっ」

「えっと…。」

「女神さまの格好をしているから、
表面の私だけを気に入っているなら
それは寂しいなって…。」

「そうじゃなくて、私という女性を愛してくれるならそれが一番嬉しいなって……」

「女神さまを、じゃなくて、私自身を好きになって頂きたかったです」

「……うん
とっても素敵で、「生懸命などころとか
近くに居てくれたら、どれだけ嬉しいだろうって」

「僕自身そう思うよー」

「本当ですか?」

「うん!これは僕の偽らざる本心!
僕の大事な人になってくれますか?」

「はいっ!」

「喜んで!」

「……はははは!
あははは!」



「ちよっ！
何を笑ってるんですか！」

「ごめんごめん！
何だかこの状況が可笑しすぎて！」

「自分の好きな格好をしてくれている女性が
しかもこんな淫らな状況で……
こんな話をするだなんて……」

「もう！
せつかくいい雰囲気なのに！
水を差すようなこと言わないでくださいよー！」

「ごめんごめん！
でも……本来なら沢山あるハードルというか、
それら乗り越えてから行き着くはずのこの状況に
何もかもすっ飛ばしてしまったように……
可笑しい状況だよね！」

「……えへへ
そうかもしれませんね♪
たしかにおかしいです！」

「もつといい雲田気でどロートークしたかったのに、
台無しにしちゃったね!」

「いえ!

「こんな可笑しい状況、私も笑わずには居られないですよ!」

「そっつ、

「ははは!よかったよ!」

「お兄さんともっと仲良くなって

もつというんなエツチ…したいなあ…」

「お望みとあれば、
どんなプレイだって…」

「全部受け止めてくれる?」

「えへへ」

「痛いのかは嫌ですよ」

「最高に気持ちよくて、相性のいい同士、
痛いなんて、こっちから願って下げさ!」

「愛の無いエッチも私は嫌ですからね！
お互いに気持ちよくなれるような……ね！」

「もちろん！後悔なんてさせないからね！」

「ああ……」

「ん？どうかした？」

「何だかこんな話をしてたら体がウズウズして……」

「……僕の精液を垂れ流すその姿……
最高にエッチだね……
本当に僕のものになったって感じが……」

「ああー！

そういう関係になったからって
いきなり自分のもの宣言ですか？」

「そっ、そんなつもりじゃないけど……」

「その姿を見てたら…僕も熱く…」

「ああ…私のこの姿を
オカズにしちゃうんですか？」

「最高にエロいよ！
女神さまが精液を股間から垂れ流す姿…
最高にエロい！」

「ああ…また大きく…」

「今日はもう何度も出しちゃうつもりだ…」

ドキ♡
ドキ♡

「僕だけの女神さま…！」

「僕の精液でいっぱいにしてあげるからね！」

「女神さまを独り占めですかあ？」

「女神さまを束縛して、」

「さらに精液、出しちゃうんですかあ？」

「ごめんね！」

「女神じゃなくて、君自身を愛するなんて言った後に
こんなこと…」

シクシク…

「だけど今は！」

今は女神さまである君を…
君にぶっかけて！

「はー！」

この姿の私で興奮してくださいー！
今はこの姿の私をー！」

「あなたの好きなようにできる
この私を見て！興奮して！ぶっかけて！」



「ああ！嬉しいよ！」

僕だけの女神さま！
女神さまにぶっかけるからねー！」

「かけて！私にぶっかけて！」

ザーメン垂れ流してる私にぶっかけて！」

「私を愛してくれる、

あなたのザーメンでいっぱいにしてえ！」

「そりゃあんだだけ相手してくれたら
疲れるよな……」

「……ありがとうね……
お店の中でのこととは言え、楽しかったよ」

「……むにやむにや……
……お兄さん……」

「寝言か……」

「お兄さん……大好きですよ……」

「……」

「バカバカ！
本気なわけないじゃないか！」



「むにゃ……お兄さんの……
おっきいおち○ほ……気持ちいいですぅ……」

「……夢の中の俺、今エッチしてるのか……
羨ましいな……」

「中に……中に出して……」

「しかも中出しかよ……」

「まあ今日は俺自身ぞうだったけど……」

「まったく……股間を丸出して
寝落ちして、しかもそんな寝言を……」

「……むにゃ……」



「…僕のこと大好きなんだよね…」

「大好きな人とエッチするのは嬉しいよね…」

「寝落ち中でも…」

「むにやむにや…お兄さん大好きですう…」

「…」



「夢の中だけでなんて…悔しすぎる…」

「んんんあ……」





「ああああ...やっぱり最高...」

「痕落ちてててもいいの締め付さー!」

「女神さまのアンソ」最高!」



「また来ますからね！」

またゆっくりとエッチしましょうね！」

「あ、やあ……は、は、は、は……す、す……」

結局、その後一発出してしまった…。

シャワーを浴びなおし、書置きを置いて出てきたが…。

何とも言えない至福の時間。

このようなお店があることを今更ながら驚愕している。

このようなお店を知っていて、

しかもそれを共通の話題として提供できるのであれば、

その者同士、強い連帯感を持てるのも納得できる。

先輩に心の底から感謝しつつ、

家路についたのであった。

191



次は自分が広げる番！

この世の中に自分という存在を広げるその手段として、
大いにこのお店を利用させてもらおう！

191



End.

奥付.

この度は当サークルのイラスト集
「あの子に会える噂のマッサージ屋さん vol.2」をご購入いただきありがとうございます。

前回の1作目もご好評をいただき、めでたく2作目の制作をすることができました。
今後もシリーズとして続けていければいいなと思っております。
まだまだ構図なども未熟なので、勉強勉強ですね。
3作目が完成した際は、是非ともよろしく願いいたします。

次に会うのは誰になるやら、、、

8月吉日
代表、tatsuya

制作 : Guild Plus
mail : super_sonico_saga@yahoo.co.jp
twitter : @guild_tatsuya